

人間・人間性についての省察 ——教育・福祉・医療の基礎としての——

Reflection of Human and Humanity

大塚 明 敏*
Akitoshi Ohtsuka

はじめに

「よき政治を求めするには、古今の現実社会に生きる人間をありのままに理解するにしかず」と説いたルネサンス末期のイタリア・フィレンツェ共和国の書記官マキアヴェリのひそみにならって、今日の時代によき教育やよき福祉、あるいは、よき医療というものを追求しようとするならば、古今の現実社会に生きる人間を、道徳性や価値観抜きにリアルに把握する必要性が生じてくるのは、論理の帰結として極めて当然のことではあるまいか。

いずれにしても、教育とか、福祉、医療という分野において、それを専門に職業としてたずさわる者は、全て、人間とか、人間性、あるいは、人間の本質、本性というものについて一般の人々以上によく知っておく必要があることは、言うに及ばないことである。

何故ならば、その理解の度合いがよき教育のためのQOL、よき福祉のためのQOL、よき医療のためのQOLを、受益者である子どもや老人、障害者、病気の人たち、といった人たちに保障することを決定することへと連動していく可能性が大きいからである。

人間や人間性の省察については、古代のギリシャ、ローマ時代以来、今日に至るまで、宗教や哲学、科学等の力を借りて、その時代なりの理解が精一杯試みられ、種々なとらえ方がなされてきている。それにも拘らず、なお解明つくせないのが、人間とか、人間性、人間の本質、本性、人間

とは何か、というものであろう。

モーゼ、キリスト、マホメット、孔子、孟子、お釈迦様、ヘラクレイトス、ピタゴラス、デモクリトス、ソクラテス、プラトン、アリストテレス、アウグスチヌス、トーマス・アクイナス、マキアヴェリ、ルター、ホッブス、ロック、デカルト、パスカル、ヴォルテール、モンテスキュー、ルソー、アダム・スミス、ベンジャミン・フランクリン、トマス・ジェファーソン、ジェレミ・ベンサム、ロバート・オーエン、カント、ヘーゲル、ミル、ダーウイン、スペンサー、フォイエルバッハ、マルクス、ショーペンハウアー、ニーチェ、ジェムズ・デューイ、ラッセル、ヴィントゲンシュタイン、ベルグソン、フッサール、キルケゴール、ヤスパーズ、ハイデッガー、フロイト、マルクス、イプセン、トルストイ、サルトル等々の限りない聖人、賢人、宗教家、哲学者、大学者、研究者、文豪、思想家、と言われる人々が、人間について問い続けてきている。

そうして、ドイツの哲学者であるハイデッガーは、多少傲慢の嫌もないではないが、現代における人間理解について次のように述べている。

「如何なる時代も現代ほど人間について、かくも多くのことや、かくも多様のことを知らなかった。如何なる時代も現代ほど、人間についての知識を徹底的に、かつ綿密な仕方でも叙述したことはない。また如何なる時代も現代ほど、かかる知識を迅速、かつ容易に普及することはかつてなかった。しかしながら、また現代ほど、人間は何であるかを知らない時代もなかった。われわれの時代

*教授

ほど、人間が疑問とされた時代はない。」

ハイデッガーが指摘する通り、現代の人間に関する諸科学は、人間の生物学的、心理学的、医学的、社会学的、歴史学的という諸現象の諸部分について微細にして広汎な諸研究を行い、限りなく多種多様な知識を我々に与えたのではあった。しかしながら、その割には、トータルとしての人間や、人間性、人間の本質や本性、人間とは何か、ということについては、今もって十分には把握されていないのが実態ではなからうか。

実際、欲しい時に、人間そのものについて直接言及した研究物や、著作を探そうとすると、びったりと満足のいくような叙述や説明がなされているような該当物を発見することは皆無か、さもなければ、至難の業であるあると言つてよからう。

筆者の場合も、この研究に着手する直接の発端となったのは、聴覚障害児に対する言語指導を組織的に整理するに当たって「言語(言葉)とは何か」を問う必要を生じ、それをつきつめて行った結果、その本質を探るには言語のユーザーである人間自体を問わざるを得ないという羽目に陥り、その追究を始めたところ、それに直結する資料が如何に貧困であるかを痛感し、必要に迫られて、自ら人間の探究を始めるに到ったという次第である。それが結果として、この論文と化したのである。

I 研究の方法

最初は、哲学、教育学、心理学、ことわざ辞典等の本を中心に何冊もの本について、人間とは何か、あるいは、人間性とは何かについて書かれている部分を中心に抜き書きをするという方法を用いていたが、断片的で偏り過ぎになる傾向があることに気づき、この方法によって得た資料は全部放棄することとした。

次に考えた方法は、特定の著者の特定の著書、特定の論文について全体を通して具体的、直接的に人間や人間性について指摘しているところや、筆者なりに全文や行間を読んで人間や人間性について書いたと読み取れるところをも含めて資料として全部採取するという方法であった。結果的には、この方法によって研究を進めたということ

ある。

人間や人間性に関する筆者なりの基準は、特定の思想、信条、宗教観等にわずらわされることなく、道徳とか、理性優先の発想、現在社会に生きている価値観などは、むしろ、できるだけ排除した立場で、あたかも科学者が物質を扱うように、善悪抜きに即物的に、ありのままに、人間や人間性の書かれた事実を原資料である諸大家の著書、論文に即して丹念に採集するように努めたつもりである。

ただし、可能なる限り避けたつもりではあるが、筆者も生身の人間である以上、多少の独断と偏見が入り込む余地があったであろうことは、厳密に考えた場合、避けて通れない問題として江湖にお許しを願う他はない。

人間や人間性を追究する直接的な原資料として用いた著書や論文は以下の通りである。

- 1 エーリッヒ・フロム著「希望の革命」作田啓一、佐野哲郎訳 紀伊国屋書店 1971
Erich Fromm : THE REVOLUTION OF HOPE Toward a Humanized Technology
- 2 エーリッヒ・フロム著「愛するということ」懸田克躬訳 伊国屋書店 1971
Erich Fromm : THE ART OF LOVING
- 3 エーリッヒ・フロム著「悪について」紀伊国屋書店 1964
Erich Fromm : THE HEART OF MAN —Its Genius for Good and Evil—
- 4 安田一郎著 人と思想「フロム」 清水書院
- 5 B. ベレンソン、G. A. スタイナー共著「人間行動学事典」南博訳 誠信書房 昭和43年
Bernard Berelson and Gary A. Steiner : HUMAN BEHAVIOR —An Inventory of Scientific Findings— 1964
- 6 ルネ・デュボス「人間と適応 —生物学と医療—」みすず書房 1965
René Dubos : MAN ADAPTING
- 7 時実利彦著「人間であること」岩波書店 1970
- 8 杉靖三郎著「人間の生態」中山書店 昭和50年

- 9 茅野良男「文化と欠如存在としての人間」『現代のエスプリ82 人間学とは何か』至文堂 昭和49年
- 10 茅野良男「哲学的人間学とは何か」『現代のエスプリ82 人間学とは何か』至文堂 昭和49年
- 11 藤田健治「哲学的人間学 — その基本理念と体系的基礎づけについて」哲学会編『哲学雑誌』第758号 有斐閣 昭和46年
- 12 塩野七生著「マキアヴェッリ」新潮社 平成4年
- 13 西村貞二著「人と思想 マキアヴェッリ」清水書院
- 14 会田雄二「マキアヴェッリ」中央公論社
- 15 新堀通也・小笠原道雄編著「教育学」福村出版 1983

何故に以上のような原資料を用いたのかという根拠であるが、厳密な基準があって選んだのではなく、筆者自身が人間とは何か、人間性とは何かを問うプロセスにおいて特に興味を抱いた著書、論文、深入りしてのぞき見したくなった興味ある人物の言説等をたまたま活用したというだけのことである。その意味においては、資料の選択に偏りのリスクが全くないかと言えば、それも多少あるであろうことを予めお断りしておく。

II 研究の結果

— 諸家の人間観 —

それぞれの大家が、人間や人間性というものをどのようにとらえているのか、ということ、すなわち、人間観を具体的に示すと以下の通りである。

それぞれの人の説やとらえ方には、相互に重なり合う部分もあるし、そうでないその人独自の発想による部分も読み取れるが、それでよしとしたものである。

かなり細かな資料を収集したつもりではあるが、これでも決してまだまだ十分には人間や人間性をつかみきってはいないと考えている。何故ならば、人間というものは、それぐらい未知なる存在であるが故である。しかしながら、人間や人間性を理解する上で、こういった資料が全くないよりは増しぐらいの手掛りとしての役割ぐらいは果

たしてくれるであろうと確信するものである。

1 精神分析学者 エーリッヒ・フロム (Erich Fromm 1900~1980) の説

<人物について>

1900年、フランクフルト(独)の敬虔なユダヤ人家庭に生まれ、青年時代まで宗教的雰囲気の高い環境の中で育つ。20代前半は、ユダヤ教活動にも力をそそぎ、「自由ユダヤ学校」の運動にも参加する。

1922年、ハイデルベルヒ大学にて学位を取得し、ミュンヘンとベルリンの社会研究所で精神分析学を学ぶ。その後1932年までフランクフルト社会研究所にて更に研究を続ける。1934年、ナチスに追われてアメリカに渡る。コロンビア大学等、アメリカの有名な諸大学で教授をつとめる。その他、ワシントン精神病研究所にもつとめ、ニューヨーク科学アカデミーの会員にもおされる。

現代の著名な社会心理学者、精神分析学者のひとりであり、人道主義的な方向をもつ精神分析の主要な代表者と見なされている。マルクスの主張する社会・経済システムの人間化とフロイト主義(精神分析)を結合することが、そのライフ・ワークであった。

<人間観について>

○人間は、狼にもなり得るし、羊にもなり得る存在である。

○人間は、善にも、悪にも染まり得る存在である。

○人間は、煩悩を持つ存在である。

「煩悩」とは心を、悩まし、身を煩わす心の作用を言う。煩悩の数は108とも、あるいは83,000あるとも言われている。しかも「煩悩の犬は追えども去らず」という例えがあるくらいに、煩悩というものは、あたかも犬が人にまわりついて離れないように人につきまるとして離れないものである。……筆者註

○人間は、肉体でもあり、魂でもある存在である。

○人間は、天使でもあり、動物でもある。

- 人間は、動物の一種である。
- 人間は、自然の捕らわれ人でありながら、思考することにおいては自由な存在である。
- 人間は、自分自身とか、自分の過去、および未来について、すなわち、自分が死ぬということや、自分の弱さ、無力さ、といったことについて気づいている存在である。
- 人間は、他人を他人として、すなわち、友人は友人として、敵は敵として、異邦人は異邦人として意識している存在である。
- 人間は、社会的（政治的）動物である。——アリストテレス
- 人間は、約束する動物である。——ニーチェ
- 人間は、予測と想像によって製作する動物である。——マルクス
- 人間は、自由な存在である。
- 人間は、生きて行く上で直接、間接に役立つ様々な攻撃性を有する存在である。
- 人間は、有害な破壊性を有する存在である。
- 人間は、ホモ・ファベル（Homo faber 道具を作る人）である。
- 人間は、ホモ・サピエンス（Homo sapiens）知恵を使う人）である。
- 人間は、ホモ・ルーデンス（Homo ludens 遊ぶ人）である。
遊ぶということは、直接的な生存の必要を超越した活動のことである。実際、洞窟に絵を描いた人間の時代から今日に至るまで、人間は遊びに夢中であったという事実がある。
- 人間は、ホモ・ネガンズ（Homo negans 「ノー」と言い得る存在）である。
たいいての人間は、自分の生存や利益にとって必要な時には「イエス」と言うか、それにもかかわらず「ノー」と言うことができるか、のいずれかである。
人間の行動を統計的に見れば、人間はむしろイエスマンと呼ばれるべきであろう。しかし、人間の可能性から見ると、人間は、「ノー」と言うことによって、自分の肉体的生存を犠牲にしてまでも、真実や愛、誠実などを貫くところが、他の動物と区別される場所である。
- 人間は、ホモ・エスペランズ（Homo esperans 希望を持つ人）である。

希望を持つということは、人間であることの根本条件である。

- 人間は、様々な可能性を持つ存在である。
例えば、人間には、善人もいれば悪人もいる。愛情深い人もいれば、破壊的な人もいる。だまされ易い人もいれば、しっかりしている人もいる。絵のわかる人もいれば、色自体がよく見えない人もいる。聖者もいれば、悪漢もいる。など、などというように。
- 人間は、ひとり、ひとりが、全ての人間性、すなわち犯罪者のみならず、聖者ともなり得る可能性を自分の中に持っている存在である。
- 人間は、生きていくための行動において本能の決定力が最低となっている動物である。
- 人間は、体重と比較して脳の大きさと複雑さとが途方もなく増大している動物である。
- 人間は、常に別れ道に直面し、しかも自分の行なう決定に失敗の危険性をも伴う存在である。
- 人間は、自然の気紛れとして生まれた存在である。
- 人間は、自然の中にありながら自然を超越している存在である。
- 人間は、社会生活の中で行動と決定の原理を見出して、それを本能の原理と取り換えなければならない存在である。
- 人間は、社会、文化といったある方向づけの枠組を持つことによって、首尾一貫した行動の条件としての首尾一貫した世界像を作り上げなければならない存在である。
- 人間は、社会や文化に大きく影響される存在である。
- 人間は、死や飢えや怪我などの危険だけではなく、もう一つの人間独特の危険である狂気の危険とも戦わなければならない存在である。
つまり、人間は生命を失う危険だけでなく、精神を失う危険に対しても身を守らなければならない。
- 人間は、確実なことがない存在である。
人間にできる唯一の確実な予言は、「自分はいつか死ぬだろう」ということのみである。
- 人間は、無限の適応性を持つものではなく、比較的適応性があるという程度の存在に過ぎない。

もし、人間に無限の適応性があれば、多分、革命などは起らなかったのではあるまいか。人間は、歴史的に社会秩序と、自分の人間的欲求との間のアンバランスがあまりにも酷く、耐え難いものになるような条件に対しては、常に反抗し、抗議してきた。

○人間は、社会的秩序と、自分の人間的欲求とのアンバランスを小さくしようと試みたり、最も受け入れ易い望ましい解決法を確立しようとする欲求を持つ存在である。

こういうものが核心にあって、歴史における人間の進化のダイナミズム(力動性)を支えてきたのである。

○人間は、自分を方向づける枠組と、自分の身を献げる枠組とを求める欲求を持つ存在である。

○人間は、生来、現実に対する知識を広げようとする傾向を持つ存在である。

それは、真実への接近や、真理の探求につながるものである。

○人間は、心情と肉体とを持っていて世界(人間と自然)に情緒的に結びつくことを求めている存在である。

○人間は、精神を持つ存在である。

○人間は、生存のために何が必要であるかを知りたがるだけでなく、人生とは何かを理解したがる存在である。

○人間は、生物の中で自分を認識している唯一の存在である。

○人間は、目があるから見たい、耳があるから聞きたい、精神があるから考えたい、心情があるから感じたい、という多方面の欲求を持つ存在である。

○人間は、現実とかかわりを持ち、現実を意識する存在である。

○人間は、現実をただ社会から与えられた資料としてでなく、自らの力で把握できるようになれる存在である。

○人間は、知的発達を遂げ、しかも、どこまで発達していくかわからない存在である。

○人間は、性欲、攻撃性、恐怖心、飢え、渇き、といった動物と共有する感覚や感情的体験を強める傾向を持つ存在である。

○人間は、愛とか、思いやり、同情、その他、生

存のための機能としては役立たないあらゆる感情といった人間独得の感情を持つ存在である。

○人間は、認識し、想像し、言葉やシンボル(象徴)を用いる存在である。

この認識や想像は、人間の外側にある自然の事実、および、人間自身の持つ本性の事実にまで及ぶものである。

○人間は、成功の保証がないとしても、失敗はしないだろうという希望によって、不安に耐えることができる存在である。

○人間は、人々と密接な結びつきを持ちながらも、同時に、自由でありたいと欲する存在である。

○人間は、民族、社会、家庭という全体の一部や一員でありながら、しかも、独立を保ちたい、つまり、自分は自分でいたいという欲求を持つ存在である。

○人間は、意味や自由、自発的活動を求める存在である。

○人間は、動物界から、すなわち、本能による適応の世界から抜け出した存在である。

○人間は、自然を超越している存在である。もちろん、人間は、決して自然を捨てはしないけれども。

○人間は、自然の一部である。

しかしながら、人間が本能の縛りから脱して、ひとたび楽園である自然との一体性から追い出されてしまったからには、今さらそこへは立ち戻れないという関係がある。

○人間は、理性を授けられており、また、それを発達させ得る存在である。

○人間は、生まれた時、すでに、個人としても、人類としても未決定な、不確実な、そして開かれた状況の中へと投げ入れられている存在である。

○人間は、自分の生命が束の間の短いものであることを知っている存在である。

○人間は、自分の意志ではなしに生まれ、自分の意志に反して死ぬということを知り、自分が愛する者よりも先に、あるいは、愛する者が自分よりも先に死ぬかも知れないということを知っている存在である。

○人間は、孤独であることや、分離されているこ

と、自然や社会の力の前には助ける者もないままに置かれているということを知っている存在である。

○人間は、自然や社会からの分離を克服し、合一を成就し、孤独という牢獄から逃がれるという深い欲求を持つ存在である。

○人間は、あらゆる時代のあらゆる文化にとって同一のひとつの質問、すなわち「いかにして社会集団からの分離を克服し、それとの合一を成就するか、いかにして自分だけの個体的な生命を超えて安らぎを見出すか」という問いの解決に直面させられている存在である。

○人間は、すべて個性的存在である。

人間は、ひとりひとりが特異な存在であり、それ自身においてひとつのコスモス（宇宙）をなすものである。

○人間は、他の人間や集団と融合したい、合一したいという強い欲求を持つ存在である。

これは、人間の最も基本的な熱情であり、人類をひとつにし、集団や家族、社会を保持するところの力である。

それを成就することに失敗することは、発狂あるいは破壊、すなわち、自分自身を破壊することや他人を破壊することを意味している。対人間的融合や合一の成就を「愛」と呼ぶことにする。この「愛」なしには、人間性は一日も存在し得ないのである。

○人間は、愛し、愛される存在である。

愛とは、自由意思によって自分の持つ最も貴重なものを相手に一方的に与えることであり、愛するものの生命と成長に積極的に関係することである。しかも受けるために先ず与えるのではなく、与えること自体が非常な喜びなのである。そのことによって相手の生命や生長になにものかを必然的にもたらす。そして、これがまた自分に戻ってくるのである。こうして、お互いは喜びを共にするようになってくる。

○人間は、宗教や神を創り出す存在である。

・宗教的な形の愛は、神の愛と呼ばれるが、心理学的に言えば、別に人間の愛と性質を異にするものではない。それは、分離の不安を克服し、合一を成就しようとする欲求から発している。

・あらゆる宗教において神は最高の価値、もっとも望ましい善とされている。それ故、神の持つ特殊な意味は、人間にとって望ましい善とはなんであるかにかかっている。したがって、神の概念の理解は、神を崇拝する人間の性格構造の分析からはじめねばならない。

・私にとっては、神という概念はただ、歴史的に条件づけられたものに過ぎない。すなわち、与えられたその歴史のある時期においての、人間のより高い力についての経験、真実と合一への熱望を表わしているものに過ぎない。

2 行動学者 ベレルソンおよびスタイナー (Bernard Berelson and Gary. A. Steiner) の説

〈人物について〉

(1) ベレルソン

元来は、社会学者、コロンビア大学では、応用社会調査研究所長、シカゴ大学では図書館学、社会学の教授をつとめる。なかんずく図書館学で有名。

行動学 (Behavioral Sciences) に関しては、フォード財団の行動学研究所の指導者であった。

(2) スタイナー

シカゴ大学の心理学の教授をつとめ、「テレビの影響」などの研究で有名である。

〈行動学について〉

行動学の本家はアメリカで、行動学 (Behavioral Sciences) という用語があらわれたのは、1950年代の初めのことである。第2次大戦後とくに目立つ現代科学の大きな潮流のひとつとして、科学における総合化、統一化という傾向がある。

行動学は、その流れの中で、これまで社会諸科学によって個々に研究されていた領域を生物学の成果を踏まえながら、あるひとつの立場から総合しようとする立場である。これは、社会諸科学のひとつの近代化、ないしは革新だとも言ってもよいであろう。

行動学の起こりについては、シカゴ大学のジェームズ・G. ミラーの説によれば、1949年頃、ミラー一派のシカゴ大学の科学者たちのグループに

よって、人間の行動について経験的に確かめうる一般原理を構成し、展開しようとする試みが始められた。そして、この新しい科学は、biological and social の両方の分野を含むところから Behavioral Sciences (行動学) と名づけるのが適当であろうということになって、この学問が始まったということである。

最も広い意味での行動学は、ミラーたちの構想によるもので、そこには、人類学、生化学、生態学、経済学、遺伝学、地理学、歴史学、言語学、数学、神経病学、薬学、生理学、政治学、精神医学、心理学、社会学、統計学、動物学という広範な学問領域が包み込まれている。

〈人間観について〉

- 人間は、どの動物と比べても、予測することがほとんど不可能なくらい変化に富んだ行動レパートリーを持つ存在である。
- 人間は、他の動物と比べると、学習によって獲得する行動が多く、本能、その他の生得的傾向によって、行動が制約されることの少ない存在である。
- 人間は、優れた柔軟性を持って行動する存在である。
- 人間は、生きていく限り、環境に適応する上での行動の基本的レパートリーを学習することができ、かつ、それを学習しなければならない存在である。
- 人間は、寿命の割りには、子ども時代が最も長い動物である。
- 人間は、自分の学習したことを他人に伝達し、それを累積していく存在である。
- 人間は、実際に経験しないことや、そこに存在しないものについても考えることができる存在である。
- 人間は、物や事柄、関係といったことを単に直接、身体的に経験するだけでなく、それに代わって内面的に言葉というシンボル(象徴)を使って考えることができる存在である。
- 人間は、自分の思想を任意的で慣習的な音声(言葉)や視覚的な形象(絵や文字など)などの手段によって伝達する存在である。

○人間は、複雑な言葉や、その他の任意のシンボル体系(たとえば、数学の記号や、音譜に書かれた音楽など)を持つ存在である。

人間をそれ以外の動物から区別する特徴的な行動は、明らかに言葉を持っている点にある。

人間以外の動物は、音声と身振りによってコミュニケーションを行なっている。こういった部分のいくつかは、人間のコミュニケーション・システムと共通な特性を有している。しかし、どの動物コミュニケーション・システムも修飾可能性と複雑さにおいて人間の言葉に近くことはできないのである。

○人間は、必ずしも純粋に生存に必要でないような事柄にもめり込んでしまう存在である。

特に、基本的、生理的欲求が十分に満たされている社会で、多くの人々がやりたくてやっていることの大部分は、身体的健康には関係がなく、むしろ、有害であるようにさえ見える。

その最も一般的な例としては、喫煙、飲酒、美容のためのダイエットなどがあげられる。極端な例としては、犠牲、戦争、自殺などがある。

○人間は、身体的欲求や種属保存の欲求から生じる食べること、性行為、小さい子どもを育てるというような行動でさえも、他の動物の場合と違って、必ずしも生理的欲求によってのみ直接コントロールされることのない動物である。

つまり、そのような行動でさえ、人間の場合はシンボリックな要因(例えば言葉)や経験によって大きく影響されるということである。

○人間は、動物と比べると、長い時間をかけて発達し、成熟し、社会化し、人間となっていく存在である。

3 生物学者 デュボス(René Dubos)の説

〈人物について〉

著名な微生物学者で、生物学の広範な様相を理解し、独創性の高い理念を築いてきた生物学者のひとりである。

科学の研究の方法論的立場に還元主義(reductionism)と総合主義(統合主義)とがあるが、デュボスは後者の立場に足場を置く研究者である。

環元主義というのは、全ての現象を単純なものに帰着させようという立場で、複雑な現象系を、より簡単な部分系に分析し、究極的には、分析して得られた知識に基いて、元の系を考えの上で、また実験的に再構成しようとする立場である。

その典型的な例は分子生物学で、生体の形と働きを器官の構造と機能に分けて考え、一つ一つの器官については、それを構成する組織、細胞によって、全てが起こると考え、そして、その細胞の働きも全てタンパク質、その一部である多種類の酵素、遺伝子 (DNA) の機能であると考ええる。

これに対して、総合主義の方は、複雑な現象系を個々の部分に分けたときには、その系としての特色は大部分失なわれてしまうから部分系についての知識はそれなりに重要ではあるが、もとの複雑な系についての観察、記述、そこでの関係を明らかにしなければならないとする立場である。デュボスはこの流派に属しており、生物現象を人間をも含めてトータルにとらえていこうとしているように見受けられる。

また、歴史上の知識や、文学的素養なども非常に豊かな人と言われている。

〈人間観について〉

- 人間は、明らかに動物の一種である。
- 人間は、誰が見ても他の動物とは異なったものであると考えさせる特有の性質である「人間らしさ (humanness)」を具えている存在である。
- 人間は、それぞれが一つのまとまりを持つ存在である。

人間生活のどんな出来事を取り上げてみても、そこには、遺伝的因子、環境因子、歴史的要因、意識的かかわり、無意識的かかわりといった全ての力が同時に働いているものである。

- 人間は、骨肉にきざみ込まれたこれまでの進化の過去から保ち続けている全ての生理的要求と、衝動に基づけられた本能的、心理的、倫理的存在である。
- 人間は、物事を象徴化 (シンボライズ、言語化) する知的才能を有する存在である。

これは、人間に起こったことの全てのことを象徴化(言語化)し、また、この象徴化(言語化)

されたものに対して、あたかも環境からの実際の刺激に対するように反応するという傾向を元来、人間は持っているということを意味している。

- 人間は、経験や学習によって大きく影響される存在である。
- 人間は、決して起こることがないようなことをも含めて、存在していないものを想像できるという傾向を持つ存在である。
- 人間は、社会的生物である。

人間は、自分の生理的要求のためにも、情緒的満足の点においても、人間が人間として育つためにも、自分以外の人間に強く依存している存在である。

このように人間の本性には、複雑な社会集団の一員として生活していることから導かれる全ての属性も含まれているわけである。

- 人間は、本能だけでは生きて行けない生き物である。

実際、もし、本能というものを、環境への特異的適応で習得する必要のないもの、と定義づけるならば、人間の子どもは、生まれた時にはごく不満足な能力しか持っていないくて、更にずっと数年の間、欠陥をもったままであることになる。

したがって、本能だけではこの世界に生きて行くには全く不十分であるから、長い発育期の間ずっと母親による養育という個人的な関係が極めて重要となってくる。

事実、人間は、その生涯を通じて、他の人からの支援と励ましを続けて必要としている。その上、文明の発達そのものが、益々そのような状況を増幅、拡大しているということが言えよう。

- 人間は、生物としての衝動性や、必要性和相反するような倫理的行動様式をつくり出す存在である。

フロイトが指摘したように、法律では、人間がしでかしそうにないことを禁止するというようなことはない。

「汝、殺すなかれ」「汝、隣人の妻を姦淫することなかれ」というモーゼの戒めにしても、少数の本当の悪人を目標にして作られたものでは

なく、どこにでもいるようなごく普通の人を対象とした戒めなのである。

- 人間は、個人としてであれ、集団としてであれ、現実と理想のギャップを認識し得る存在である。

個人的、あるいは、集団的行動の上で、「～である」ということと、「～すべきである」ということとの差を認識できることは、人間が社会生活を送る上で、最も基本的なものの一つである。

- 人間は、文化を持っており、その文化を身につけ、その文化に適応し、自らもその文化の創造に参加し、かつ、後の世代へその文化を伝えて行く存在である。

ここで言うところの文化とは、意識的、無意識的にそうするようにと教えられた結果として人間が行なっていることを意味している。すなわち、人間にのみ特有な生活の産物であり、遺伝的、生理的からくりとは無関係に作用するものである。

4 大脳生理学者 時実利彦の説

〈人物について〉

1909年生まれ、1934年東京帝国大学医学部卒業、専攻は脳生理学、京都大学教授、霊長類研究所長等を歴任する。主要な著書としては「脳の話」「人間のからくり」「脳のすべて」「こころの生理学」「脳と人間」「目で見える脳」等がある。また主要な訳書としてマクレーン「脳のはたらき」フルトン「神経系の生理学」等もある。

〈人間観について〉

- 人間は、社会生活をする動物 (Animal social) である。——アリストテレス (Aristoteles)
- 人間は、理性をもった動物 (Animal rational) である。—— (Socrates)
- 人間は、考える葦 (Roseau Pensant) である。
「人間はひと茎の葦に過ぎない。自然の中でもっとも弱いものである。だが、それは、考える葦である。」——パスカル (B. Pascal)
- 人間は、言葉を操る動物 (Animal symbol-

icum) である。——カッシーラー (E. Cassirer)

- 人間は、道具を作る動物 (Animal instrumenticum) ——カッシーラー (E. Cassirer)
- 人間は、工作する人 (Homo faber) である。——カッシーラー (E. Cassirer)
- 人間は、遊ぶ人 (Homo ludens) である。——ホイジンガー (J. Huizinga)
- 人間は、脳によって人間となる存在である。
医学の祖、ヒポクラテス (Hippocrates) は次のように書き残している。

「人は脳によってのみ、歓びも、楽しみも、笑いも、冗談も、はたまた、嘆きも、悲しみも、涙の出ることも知らなければならない。特に、われわれは、脳があるが故に、思考し、見聞し、美醜を知り、善悪を判断し、快、不快を覚えるのである。」

- 人間は、脳が発達した動物である。
- 人間は、二本足で直立し、歩行する動物である。——化石人類学者
- 人間は、火を使って生活する動物である。
- 人間は、手を使う動物である。
- 人間は、言葉を話す動物である。
- 人間は、教育され得る動物である。——ランゲフェルド (M. J. Langeveld)
- 人間は、生理的早産の動物である。——ポルトマン (A. Portmann)
- 人間は、教育されなければならない動物である。(Animal educandum)
- 人間は、あらゆる動物の師表である。
ハムレットの第三幕には、次のような言葉がある。

「なんと素晴らしい傑作であるか、この人間!」
その理性は、こよなく崇高!
その能力には、果てしがたい!
その姿態の華麗さと、その動作の機敏さ!
その振舞いは、天使のよう!
その理解力は神のよう!
その地球の美しさのお手本!
あらゆる動物の師表である!

——シェクスピア

- 人間は、ホモ・スツルツス (愚かな人) である。——シャルル・リシエ
- 人間は、非合理的存在である。

○人間は、笑う動物である。

「怒りは動物の情、笑いは人間の情」という文句がある。笑ったり、泣いたりするのは人間だけである。

○人間は、間違いをおかす存在である。

「人間という奴は、何かをやると必ず間違いをしないではいられないらしいな。まるで間違いをするために何かするみたいだ。」

——森本 薫作「女の一生」

○人間は、迷う存在である。

「人間は、努力する限り、迷うものだ。」

——ゲーテ (W. Goethe)

○人間は、学習する存在である。

○人間は、本能的な欲望を持つ存在である。

支配欲や愛情(愛し、愛されたい)、食欲・性欲等を持つ存在である。

○人間は、自分以外の個人や集団と融合、合一したいという要求を持つ存在である。

性欲にしても、食欲にしても、それらの本能的行動を共にすることは、お互いの心をこよなく融合させるものである。そういうこともあって、人間は、理屈ぬきで心の融合を計るために性行動はいうに及ばず、食行動を共にする手をも使っている。神事や仏事における酒宴は、神人合一の世界をつくり出すための仕掛けである。

○人間は、快楽原則で生きる存在である。

○人間は、自然淘汰、適者生存の世界に生きる存在である。

○人間は、自分の心を見ることが出来る存在である。

そのことについて、フランスの哲学者、モンテニュー (M. E. Montaigne) は、随想録の中で次のように述べている。

「世人は常に自己の正面を見る。

私は、目を内部にかえす。

そこに据えて、じっと離さない。

各人は、自己の前を見る。

私は、自分の内部を見る。

私は、ただ私だけが相手なのだ。

私は、絶えず私を考察し、私を検査し、私を吟味する。」

○人間は夢見る存在である。

アウシュヴィッツの生き残りである精神科医のフランク (Victor. E. Frankl) は、著書の「夜と霧」の中で、次のように述べている。

「自分自身の未来を信ずることができなかった人間は、収容所で滅亡していった。未来を失うと共に彼はその拠りどころを失い、内的に崩壊し、身体的にも、心理的にも転落したのであった。人間は夢見ることができないと、生きる精神力がなくなるのである。」

5 生理学者 杉 靖三郎の説

〈人物について〉

東京帝国大学医学部を卒業したわが国における著名な生理学者で、医学博士、長年にわたり東京教育大学教授をつとめる。

〈人間観について〉

○人間は、万物の霊長である。

○人間は、ホモサピエンス (考える人) である。

○人間は、言葉を持つ存在である。

○人間は、道具を使うことを知っている存在である。

○人間は、ホモ・ファーベル (道具を作る人) である。

○人間は、ホモ、スキャンチャ (細かく調べる人) である。

○人間は、ホモ・エコノミクス (経済を考える人) である。

○人間は、人間らしさとも言うべき心のはたらきを持つ存在である。

○人間は、独自の個性を持つ存在である。

○人間は、小宇宙であり、小世界である。

○人間は、この宇宙における不可思議な存在である。

○人間は、「生命とは何か」「人間とは何か」を認識し、考えることができる存在である。

○人間は、自然が創り出したあらゆる物質のうち、最も精巧なものの極地とも言うべき身体を持つ存在である。——フランス・ベーコン

○人間は、第二等星級の星のまわりを回るたいし

て重要でもない「地球」という星くずの上に、偶然にも宿ったものである。

- 人間は、最も弱い輩である。しかし、考える輩である。——パスカル
- 人間は、宇宙の暴力の前には、ひとたまりもなく滅び去る存在である。
しかし、人間は、彼を殺すものよりも、はるかに尊い存在である。何故ならば、人間は自分の死というものについて知っているからである。
- 人間は、宇宙の壮大さの前には、弱小存在に過ぎない。
- 人間は、孤高の存在である。
- 人間は、複雑きままりない生命体である。
- 人間は、あまりにも複雑過ぎる存在である。
- 人間は、天文的宇宙に比べて、遙かに広大で、素晴らしい働きをする心や身体を持つ存在である。
- 人間は、生きているという自覚を有する存在である。
- 人間は、自分が他の人と違った個性を有することを知っている存在である。
- 人間は、分解することのできない一つの全体である。
全体とは、組織であり、体液であり、そして、意識でもある。
- 人間は、肉体と精神を有する存在である。
しかし、それは、人間の概念によってでっちあげられた部分部分なのであって、実際には分離して存在するものではない。
- 人間は、生き物であり、生長し、発育する存在である。
- 人間は、精神的な働きと、身体的な働きを持つ存在である。
- 人間は、生理的な身体活動とともに、心理的な精神活動を持つ存在である。
- 人間は、知識を獲得する存在である。
- 人間は、感覚や思想を有する存在である。
- 人間は、生きて働く存在である。
- 人間は、愛と憎しみを持つ存在である。
- 人間は、苦悩する存在である。
- 人間は、精神的な独自性、すなわち、個性を持つ存在である。

心が豊かな人、心が貧しい人、心が広い人、心が狭い人、優柔不断の人、反対癖の人、衝動にかられ易い人、気の弱い人、心配性の人、慎重な人、克己心の強い人、目のつけ所が局部的な人、総合的な人、理づめな人、直観的な人、知能型の人、感情型の人、意志型の人、外向的な人、内向的な人、など、いろいろである。

その多様性たるや今日の心理学では、手のつけようもないくらいのものである。

- 人間は、父、兄弟、先生、友人などの恩恵により、また自ら精進努力することによって、どこまでも個性が伸びていく存在である。——江戸時代末期に出た「生理発蒙」という書物の中に述べられている。
- 人間は、力をつくして闘う存在である。
- 人間は、死ぬ存在である。
- 人間は、学問の世界を創り出す存在である。
- 人間は、生きている個人、個人である。
- 人間は、周囲の人々との間で精神的に影響し合う存在である。
- 人間は、目に見えない外界の他に、個人同志を結びつけている目に見えないつなぎ目を持つ存在である。
- 人間は、一人一人個性を持っているが、他の個性と互いにつながり合い、結ばれている存在である。
- 人間は、社会という環境の中であって、互いに他と関連し合って存在している個体である。
- 人間は、個体として独自性を持つ生き物である。
- 人間は、心を持つ存在である。
- 人間は、肉体的なものに、精神的なものが協調する存在である。
人間は、昔から言われているように「心身一如」「物心一如」の存在である。
- 人間は、真、善、美に対して非功利的な（無我の）献身をすることができる存在である。
- 人間は、純粹創造的な活動にも身を任かすことができる存在である。
- 人間は、有機体である。
- 人間は、人間らしさを持つ存在である。——ヴォルテール
- 人間は、不可分の肉体と精神とを有する全体と

しての個体である。

- 人間は、大脳が他の動物に比べて大きい動物である。
- 人間は、顔面がまっすぐに直立している動物である。
- 人間は、直立して、二足歩行ができる動物である。
- 人間は、体じゅうの毛が少ない動物である。
- 人間は、火を使う動物である。
- 人間は、道具をつくり、使う動物である。
- 人間は、言葉を使う動物である。
- 人間は、真似をする能力が高い動物である。
- 人間は、文化を創り、文化を伝える存在である。
- 人間は、大脳の働きが複雑で緻密な動物である。
- 人間は、同じ仲間たちに、自分の持っている知識や技術を教えようとする強い本能にも似た欲望を持つ存在である。
- 人間は、物理的環境に対すると同じく、社会的環境にも適応していく存在である。
- 人間は、肉体的欲望のとりこである。——オルダス・ハックスリー
- 人間は、本能のとりこであり、肉体の衝動にかられる生き物である。——D. H. ローレンス「チャタレイ夫人」より
- 人間は、生まれてから、一定の年月の後に死んでいく存在である。

つまり、人間は、人生というものを持つ存在である。

その人生には、それぞれの時期というものがある。

- 1 胎児期 受胎して生まれるまで
- 2 乳児期 生まれてから乳離れするまで
- 3 幼年期 乳離れをして、学齢期に達するまで
- 4 少年期 6歳から13、4歳ぐらゐまで
- 5 青年期 13、4歳から20歳ぐらゐになるまで
- 6 成年期 20歳ぐらゐから60歳ぐらゐまで
- 7 老年期 60歳以上

これらは、それぞれ発育の段階を示すもので、それぞれ生理的、構造的に特徴がある。

その他、人生の各時期は、別のいろいろな呼び

方もある。

例えば

- 1 嬰^{もい}児^{じき}期
- 2 児童期
- 3 青春^{せい}期
- 4 破^や爪^{つめ}期
- 5 春^{はる}期^{はつ}発^{はつ}動^{どう}期
- 6 更^{より}年^{ねん}期
- 7 老^{らう}衰^{すい}期

これらはいずれも生理的機能の発達、または、減退の特徴的な標徴を標準として名づけられたものである。

6 哲学者 茅野良男の説

〈人物について〉

1925年生まれで、東京大学文学部哲学科を卒業した哲学者である。北海道大学、お茶の水女子大学教授を歴任する。主要な著書には「初期ハイデガーの哲学形成」「ディルタイ」等がある。

〈人間観について〉

- 人間は、塵埃から神の姿に創造されたものである。——旧約聖書
- 人間は、死すべきものである。——ヘシオドス
- 人間は、万物の尺度である。——プロタゴラス
- 人間は、ポリ^{ポリ}的^テ動物である。——アリストテレス
- 人間は、言葉を持つ動物である。——アリストテレス
- 人間は、魂と身体とを併せ持つ神の被造物である。——トーマス・アクイナス
- 人間は、天上的でも地上的でもない存在である。また、死すべきものでも死を知らぬものでもない存在である。——ピコ・デラ・ミランダ
- 無限と比べると虚無、虚無と比べると一切、無と一切との中間物である。——パスカル
- 人間は、人間にとって狼である。——ホップス
- 人間は、神と現実世界という二つの理念を結び

つける媒体である。——カント

○人間は、形而上学的動物である。——ショーペンハウエル

人間というものは、神、世界、霊魂などといった現象を超越したもの、あるいは、現象の背後にあるものの本質、存在の根本原理といったことを純粹思惟や直観によってとらえようとしたがる存在である。——筆者注

○人間は、まだ確定されていない動物である。——ニーチェ

○人間は、人間にとって神である。——フォイエルバッハ

○人間は、人間の世界、国家、社会である。——マルクス

○人間は、道具を製作する動物である。——ベンジャミン・フランクリン

○人間は、一年早産の哺乳動物である。——ポルトマン

○人間は、欠如存在である。——ヘルダー、ゲーレン

○人間は、「否」と言い得る者である。——シェーラー

○人間は、克服さるべき何物かである。——ニーチェ

○人間は、文化の被造物であると同時に、文化の創造者である。——ラントマン

○人間は、象徴を作り出す動物である。——カッシーラー

○人間は、世界の中にあり、かつ、世界に対してあり、自己の中にあり、かつ、自己に対してあるという外心的位置にある存在である。——プレスナー

○人間は、環境に束縛されていながら、それに距離をとり得る存在である。——ロータッカー

○人間は、己れを己れ以外のものから区別し得る存在である。

○人間は、己れを定義し得る存在である。

○人間は、生物の中の一つである。

○人間は、文化を獲得し、維持する能力を持つ存在である。

○人間は、教育可能性や可塑性を持つ存在である。

○人間は、形成され得る存在である。

人間は、殆ど本能を欠いて生まれ、生涯にわたる訓練によってのみ、人間性へと形成されるのである。

○人間は、理性を持ち得る存在である。

理性は、人間の心の注意と習練の集積であり、われわれ人類の教育の総計である。また理性は人間にとって生得的なものではなく、人間が獲得したものである。

○人間は、人間の上限としての神と、下限としての動物の間、人間を含めての自然と人間が、自然を基盤として作り出した文化との間の時間、空間的存在である。

○人間は、多面的存在である。

○人間は、文化と歴史と社会を形成する存在である。

○人間は、裏切り、虚偽、悪事をはたらき、失敗をおかす存在である。

○人間は、病気、戦争、死、絶望等の状況に影響される存在である。

○人間は、生まれながらにして知ることを欲する存在である。

ただし、それが、人間のためになる、ためにならないは別問題である。

真なる知は事柄自体を知るという目的のためにあり、この目的は必ずしも人間の幸福や安寧のためののみあるのではない。

それ故に、事柄の真相を求める好奇心と、人間の生存の維持のための努力とは、必ずしも一致しない。

したがって、事柄の真相を追究する知的好奇心の充実と、人間の生存が幸福であるに値するようという願望との調和、ないし折り合いをどのようにして見出すのが問題となる。

○人間は、有限な存在である。

○人間は、カオス的存在である。

人間は、最初から真善美聖のまっただ中にあるのではない。

真は常に偽と、善は常に悪と、美は醜と、聖は俗と混淆して不定であり、しかも、それぞれの肯定的、救済的な閃きも、容易に他の閃きとは一致し難いということがある。

○人間は、容易に統一しがたい対立や矛盾の苦悩

を、対内的にも、対外的にも、まとい続ける存在である。

- 人間は、個体として一人一人分散し、世の中で生活し、その習俗や伝統の重圧の下で生き、やがて世を去る存在である。
- 人間は、個体化し、おのれを表現し、おのれを対象化し、客体化する存在である。
- 人間は、これまでに築き上げ、伝授したものを破壊し、忘却する存在である。
- 人間は、未完結で、未完成な存在である。
- 人間は、いつも、おのれをおのれで問題とせざるを得ない存在である。

7 哲学者 藤田健治の説

〈人物について〉

1904年生、1927年東京帝国大学文学部哲学科卒業、哲学専攻。お茶の水女子大学名誉教授、文学博士、主要な著書「近代哲学原理の崩壊と再建」「現代哲学の系譜」「歴史的世界と人間存在」「シェリング」「ニーチェ」「哲学の人間学」主要な訳書ブルクハルト「イタリヤルネッサンスの文化」マレー「ギリシャ宗教発展の5段階」ヘーゲル「哲学史」ボルノー／プレスナー「現代の哲学的人間学」

〈人間観について〉

- 人間は、依然として未知なるもの、不可知なるものである。
- 人間は、英知を持つ存在である。
- 人間は、道具を作り、工作をする存在である。
- 人間は、言葉を話すことによって表現する存在である。
- 人間は、共同体を形成し、経済活動をする存在である。
- 人間は、遊ぶ存在である。
- 人間は、現実を象徴化する能力を持つ存在である。
- 人間は、文化を創造する存在である。
- 人間は、形而上学的思索をする存在である。
- 人間は、理性や欲望、情感、官能を持つ存在である。

○人間は、気分とか、関心、不安を持つ存在である。

○人間は、夢み、あこがれ、苦勞を耐え忍び、努力し、かつ、誤ちをもおかす存在である。

○人間は、自己自らを認識できる存在である。

——ハイデッガー

○人間は、心身の統一体である。

○人間は、生きようとする意志を持つ存在である。——ショーペンハウエル

○人間は、象徴作用（シンボリゼーション）の能力を持つ存在である。

○人間は、精神的存在である。

○人間は、価値や、価値規準を追求する存在である。

○人間は、一人一人が全て一回限りのかけがえない存在である。

○人間は、生命に精神の意味づけをする存在である。

8 ルネサンス・イタリアのフィレンツェ共和国書記官長マキアヴェリ（Niccolo Machiavelli 1469～1527）の説

〈人物について〉

1469年にイタリアのフィレンツェ近郊に生まれる。1494年まではメディチ家の統治下に、その後はサヴォナローラの統治下にあったフィレンツェで生活する。フィレンツェはサヴェナローラの没落により名実ともにそなわった共和国に変わる。このとき、1498年、マキアヴェリはフィレンツェの外交官として最初の重要な地位を得る。29歳にして内務、軍事、ある種の外交問題にかかわる第二書記局の書記長となる。その地位ゆえに、イタリアの諸都市国家の政治過程を直接見聞し、かつ、体験する。1512年共和制没落とともにその地位を追われ、拷問のうき目にさえ会う。フィレンツェから追放されてサン・カシアアーノの小さな私有地に閉じ込められる。その間、1513年大急ぎで「君主論」を書き上げ、恩顧を乞うために時の潜主ロレンツォ・デ・メディチに献呈するが無視される。その献策は写本で他の人の間を回覧され、マキアヴェリの死後、1533年になって、ようやく出版されることとなる。

彼が着目したところは、社会は現にどう運営されているか、人間はどう振舞っているかということであった。なにかんづく、人間の本性がどういふものかを見抜き、政治はそれにどう対処すべきかを追求することにあつた。いわば、社会や、それを構成する人間という素材を経験的、分析的、科学的に観察し、外科的な処方箋を書こうとしたのであつた。その意味では、同時代人であるレオナルド・ダ・ヴィンチが近代における最初の自然科学者のひとりであるとすれば、マキアヴェリは、最初の社会学者であつたと言ふことになるであろう。

〈人間観について〉

- 人間には、善人もいれば、悪人もいる。
- 人間には、良いところもあれば、悪いところもある。
- 人間は、百パーセント善人であることもできず、かといって百パーセント悪人であることもできない。
- 人間には、いろいろな性質の人がいる。
鷹揚な人、ケチな人、気前がいい人、強欲な人、残酷な人、慈悲深い人、不誠実な人、狡猾な人、誠実この上ない人、女々しいとか柔弱と言われる人、臆病者で意気地なしの人、勇敢で大胆な人、人間味豊かな人、傲慢で尊大な人、他人を支配したい人、リーダーになりたい人、奴隸根性の人、おかたい人、裏表のない人、裏表があるので要注意の人、色好みの人、強情で頑固な人、人好きがして愛想のいい人、落着いて威厳のある人、軽薄で深みがない人、信仰心が厚い人、思いやりに満ちている人、信義を重んじる人、思慮深い人、公明正大な人、などなど。
- 人間は、全て個性的な存在である。
- 人間は、全ての美質を一身に集めるようには作られていない。
- 人間は、不完全な存在である。
- 人間というものは、単純な動物である。

したがって、現に眼に見えるところに引きずられ易い。それが現実では、だまそうとするものは、だます相手に不足することはない。

- 人間は、人間的なものと、野獸的なものを持っている存在である。
- 人間は、愚劣で、エゴイストが多い。
したがって、法律や契約書や協定が必要となってくる。
- 人間は、諸々の欲望を持つ存在である。
- 人間は、法律と力がないと治まらない存在である。
- 人間は、正義と力とを必要とする存在である。
- 人間は、むら気で、偽善者で、厚かましく、身の危険は避けようとし、物欲には目のない存在である。
- 人間というものは、善よりは悪に染まり易い存在である。
- 人間は、悪魔的な側面をも持つ存在である。
- 人間は、よこしまなものであり、自由勝手に振舞うことのできる条件がととのうと、すぐさま本来の邪悪な性格を存分に発揮してやろうとすきをうかがうようになる存在である。
- 「弱きを助け、強きをくじく」でなく、「強きを助け、弱きをくじく」のが、人間の本性である。
- 人間は、どれほど善良に生まれつき、どんなに素晴らしい教育を受けたとしても、極めて簡単に墮落し易い存在である。
- 人間は、一致団結することが難しい存在である。
- 人間は、秩序を必要とする存在である。
- 人間は、頭脳を持つ存在である。
- 人間は思考する存在である。
- 人間は、生きていくために、あるいは生き残るために、知恵を使う存在である。
- 人間というものは、自分を守ってくれなかったり、誤りを質す力もない者に対して、忠誠であることはできない。
- 人間には、怖れている者よりも愛している者のほうを、容赦なく傷つけるという性向がある。
- 人間というものは、恩義の絆で結ばれている愛情などは、利害がからむとなれば、平然と断ち切ってしまうものである。
- 人間というものは、恐怖でつながれている場合は、復讐が怖ろしく、容易には断ち切れないものである。

- 人間は、心中に巣くう嫉妬心によって、賞めるよりもけなすほうを好むものである。
- 人間は、思慮というものによって、困難事の性質を察知できる存在である。
- 人間は、はじめからあらゆることを完全無欠にこなすということはありません。
- 人間は、説得や励ましに影響される存在である。
- 人間は、自分が最も大切にしていたものを奪われたときの恨みを、絶対に忘れないものである。
- 人間は、自由を求める存在である。
- 人間は、秩序を求める存在である。
- 人間とは、絶望的な恐怖に襲われるや、それから身を守ろうとする想いだけで、狂暴で無思慮な反撃に転ずる存在である。
- 人間は、安心して生活できるような環境を求める存在である。
- 人間は、現実の社会に適応して生きていく存在である。
- 人間は、恵まれていなければ悩み、恵まれていなければ退屈する存在である。
- 人間は、自らの実現能力をはるかに上まわることが望む存在である。
したがって、常に不満が絶えないわけである。
- 人間は、大局の判断を迫られた場合は誤りを起し易いが、個々のこととなると、意外と正確な判断をくだす存在である。
- 人間というものは、しばしば表面上の利益に幻惑されて、自分たちの破滅につながることを望むような存在である。
- 人間は、群れをなせば大胆な行為に出るが、個人となれば臆病である。
- 人間は、軽薄で、首尾一貫とはほど遠い存在である。
- 人間は、ほとんど常に、誰かが前に踏みしめていった道を歩むものである。
- 人間というものは、軽度の侮辱には復讐ふくしゅうの気持も起きるが、大きな危害を加えられると、復讐の気さえ失ってしまうものである。
- 人間の気分というものは、はなはだ動揺し易いものである。
- 人間というものは、往々にして小さな鳥と同じように行動するものである。
つまり、眼前の獲物にだけ注意を奪われているのに気がつかない小鳥のように。
- 人間というものは、一つの野心が達成されてもすぐ次の野心の達成を願うようにできている。
- 人間というものは、困難が少しでも予想される仕事には常に反対するものである。
- 人間は、恐怖心からも、また憎悪の心からも、過激になり得るものである。
- 人間にははじめはわが身だけを守ることを考えていた人も、それが達成されるや、今度は他者を攻撃することを考えるようになるというところもある。
- 人間というものは、必要に迫られなければ善を行わないようにできている。
- 人間というものは、自らの望みの限界を察知することを知らないままに、誤りをおかしてしまうものである。
- 人間というものは、権力を持てば持つほどそれを下手にしか使えないものである。
- 人間は、恩恵をほどこされた場合と同様に、恩恵をほどこす場合にも義理を感ずるものである。
- 人間というものは、危害を加えられると思っていた相手から親切にされたり、恩恵をほどこされたりすると、そうでない人からの場合よりはずっと恩に感ずるものである。
- 人間というものは、現に持っているものに加え、さらに新たに得られるという保証がない限り、現に持っているものすら、保有しているという気分になれないものである。
- 人間は、誰だって、誤りを犯したいと望んで、誤りを犯すわけではない。
ただ、晴天の日に、翌日は雨が降ると考えないだけである。
- 人間は、誰でも、なるべくならば、容易に物事を処理したいと願うものである。
- 人間は、判断力や想像力を持つ存在である。
- 人間というものは、たとえ国家や民族がちがっても、同じような欲望に駆られ、同じような性向を持っているものである。

- 同じ地方に生まれた人間は、時代が変わろうとも、同じような気質を持ち続けるものである。
- 人間のやることは、いかに完璧を期そうとも、必ず何か不都合なことを引きずっているものである。
- 人間は、人間社会を知るために教育されなければならない存在である。
「ローマ人は、負けたときもくじけず、勝ったときも傲^{おご}らない」これは正しい教育の成果である。
- 人間というものは、新しいこととなるとなんにでも魅了されるものである。
- 人間というものは、現在の状態に満足していない者はもちろんのこと、満足している者まで同じく変化を好む性向を持っている。
- 人間というものは、敬愛か、恐怖かのいずれかに突き動かされて、行動するものである。
- 人間とは、しばしば、敬愛する者よりは恐怖を感じる者のほうに、服従するものである。
- 人間は、女が介在することによって悪しき事態を生じさせることがある。
ただし、女の存在自体が悪なのではない。
- 人間は、損得勘定や欲で動く存在である。
- 人間は、生きていくために思慮と力を必要とする存在である。
- 人間は、平等を求める存在である。
- 人間は、他の人を屈服させるのに、非情で暴力的な行為をとったり、温情に満ちた人間的な扱いをしたりするものである。
- 人間は、運命に乗ることはできても、逆らうことはできない存在である。
- 人間は、運命という糸を織りなしていくことはできても、その糸を引きちぎることはできない存在である。
- 人間は攻撃性や、破壊性を持つ存在である。
- 人間は、矛盾のかたまりである。
- 人間は、カオスのごとき存在である。
- 人間は、非常に手前勝手な存在である。
- 人間は、理想を求める存在である。
- 人間は、最も複雑な存在である。
- 人間は、自らの感情や意志を持つ存在である。

9 精神医学者 マリーア・モンテッソリー (Maria Montessori 1870~1952) の説

〈人物について〉

イタリヤ生まれの精神医学者にして教育家であり、モンテッソリー・メソッドという幼児教育法や感覚訓練で有名である。

1897年より1901年にかけて知的障害児の教育にたずさわり、そこでおさめた成功を一般の幼児の教育に適用し、更に予想以上の成果を得る。これが発端となって1952年に没するまで教育に全生涯を捧げることとなる。

〈人間観について〉

- 1 人間は誰でも、この地球上に唯一無二の存在として生命を受ける。
- 2 人間は、動物としての基盤の上に存在するものである。
- 3 人間と動物との本質的な違いは、次の三項目である。
 - (1) 人間は足を使って直立歩行をすることができ、手を使って道具を製作、使用することができる。
 - (2) 人間は、言葉を使うことによって、他の者と相互に意志疎通をすることができる。
 - (3) 人間は、洞察力によって、自分の言動を客観的にとらえることができる。
- 4 人間は、個として存在することができると同時に、集団に帰属して全体の中に存在することができる。
- 5 人間は、過去の人々が蓄積してきた文化の中でのみより豊かな生活を送ることができる。
- 6 人間の未来に対する共通の課題は、今までの文化領域を維持し、発展させることであり、保持し、深化させ、かつ、拡大していくことである。

III 研究の総括

この研究で素材としたいずれの研究者の説を取り上げたにしても、それだけの資料では人間や人間性なるものを説明しつくすには、例え、それが

どのように有名な大家の説であったとしても極めて不十分と言わざるを得ない。

むしろ、この論文に取り上げている全ての研究者の全ての説をそのまま受け止め、包括的に肯定してかかることの方が、より人間や人間性の真実なり、全体像を把握することに一步近づくアプローチとなるのではあるまいか。それにしてもこれで決して不十分のそしりを免がれるほどのものとなるわけではないが。それでも、20世紀末の現在の時点なりには、このような即物的なとらえ方というものもあり得てよいのではなからうか。

最後はパスカルの嘆きの言葉をもって締めくくっておくことにしよう。「人間とは、一体何という怪物であろうか。何という珍奇、妖怪、混沌の様を呈することよ、何という矛盾の主であり、何という驚異の存在であることか。万物の審判者にして、しかも愚かで鈍いミミズである。また、真理の受託者でありながら曖昧と誤謬の入り混ったドブ川みたいなものである。別の見方をすれば、宇宙の栄光にして廃物でもある。誰がこの纏れを解くのであろうか。人間は、かようなカオスのかたまりであると同時に、考える葦でもある。」

おわりに

本当の意味での人権を尊重するとか、人権を守るとか、人間の尊厳を守るといふことは、一体どのようなことなのか。ということについての真実の理解に関しては、教育、福祉、医療、いずれの立場であれ、まだまだ手探りの段階にあるというのが事の真相ではあるまいか。

だからこそ現実の社会においては、時として新聞・テレビ等の報道に取り上げられるような野放し、出たらめ、偏差値狂いの教育、甘えの構造的寄りかかり、飼い殺しの福祉、減多切り、薬づけ、寝かせきりの医療なるものが大手を振って歩くという事例が見られるのではなからうか。

加えて、人間自体が、元来、心身一如のきわめて複雑な統合体であるが故に、さまざまなレベルにわたって「人生一寸先は闇」と言われるように色々な問題をいつ、なん時、持ったとしてもちっともおかしくない存在という事実も大きく影響を与えている。しかも人間は、どのような状態や過程にあるにせよ、この世に「オギャー」と生まれ

出でたる瞬間より生物としての死に到るまで常に人間であり続ける存在でもある。

とすれば、教育、福祉、医療等の立場の如何を問わず、ケアをする対象が人間である以上は、必然的に前述の事実を十分に認識した上での対応の仕方、援助の仕方、いわゆるヒューマンな接触の仕方というものを創造していくことが必要であらうということになってこよう。

そのためには、教育であれ、福祉であれ、医療であれ、その専門業者たるべき人々、なかんずく、現場の第一線において問題を抱えた人々に直接かかわるスタッフには、人間とか、人間性というものについてより深く理解したり、洞察したりしておくことが不可欠であろうと考えるものである。この度の研究は、これで決して十分という程のものではないが、その手掛りを現在の時点なりに発掘するための試みであったとすることができるのではあるまいか。

教育、福祉、医療、その全ての分野にわたり共通する本質は、人間の充実した生を保障する人間の、人間による、人間のためのかかわりであるという点にあろう。

個人の人間としての発達の促進や加速をはかること、人間としての成熟や自己実現をはかり、完全に機能する生産的な人間や自己超越のできる完全な人間、個性化した人間、現在の瞬間にしっかりと根をおろした「今ここに生きる人間」、しかも決して完璧主義者でなく、現実を見据え、過ちを恐れず、また、過ちに打ちひしがれず、勇気をもって常に未来へ立ち向かえる人間へと方向づけてやること、あるいは、人間としての再構造化と再自律化、精神的、身体的バランスの回復や再構築をはかること、生体としての自己組織化とか、自然治癒を促すこと、更には、個人が精一杯生きて安心立命に到るのを見守ること、こういった仕事を組織的、継続的、累積的に手厚く、しかも人間的に実施していくのが、真の意味での教育とか、福祉、医療というものではなからうか。

そして、その理想の実現に欠かすことのできないもの、それが、人間や人間性についての理解というものである。

(1998. 9. 30 受理)

引用・参考文献

- (1) 大江精志郎著「哲学的人間論の研究 一人間の実存論の一価値論的解明」理想社 昭和41年
- (2) 高島善哉、水田 洋、平田清明著「社会思想史概論」岩波書店 昭和41年
- (3) シュヴェーグラー著、谷川徹三、松村一人譯「西洋哲学史 上巻」岩波書店 昭和44年
- (4) プロノフスキー／マズリッシュ著、三田博雄、宮崎芳三、吉村 毅、松 啓訳「ヨーロッパの知的伝統—レオナルドからヘーゲルへ—」みすず書房 1972
J. Bronowski, Bruce Mazlish; THE WESTERN INTELLECTUAL TRADITION From Leonardo to Hegel 1960
- (5) シュテーリヒ著、草薙正夫、堤 彪、長井和雄、山田潤二、工藤喜作、神川正彦、草薙茅雅子共訳：「世界の思想史 下」白水社 1976
- Hans Joachim Störig: Kleine Weltgeschichte der Philosophie 1961
- (6) ポール・ジョンソン著、別宮貞徳訳「インテレクチュアルズ」共同通信社 1990
Paul Johnson: INTELLECTUALS 1988
- (7) 塩野七生著「わが友マキアヴェツリ」中央公論社 1992
- (8) ボルノウ／プレスナー著 藤田健治他訳「現代の哲学的人間学」白水社 1981
Herausgegeben von Roman Roček und Oskar Schatz: Philosophische Anthropologie heute 1972
- (9) 青土社：「現代思想の109人」現代思想臨時増刊特集 青土社 1984
- (10) D. シュルツ著 上田吉一監訳「健康な人格」川島書店 1977
GROWTH PSYCHOLOGY Models of the Healthy Personality by Duane Schultz